

ひそかに 読まれている本

『死者の贈り物』長田弘
(みすず書房 1800 円+税)



死者は「死んで・いる」存在である

平尾隆弘（編集者）

長田弘の新しい詩集が出た。『死者の贈り物』。「いずれも、親しかったものの記憶にささげる詩として書かれた。親しかった場所。親しかった時間。親しかった人。近しかったが相識することはなかった人。親しかった樹。親しかった猫。親しかった習慣。親しかった思念。親しかった旋律、親しかった書物。」と「あとがき」にある。

長田弘の詩は、だれにでもわかる言葉で書かれている。

人生は長いと、ずっと思っていた。
間違っていた。おどろくほど短かった。
きみは、そのことに気づいていたか？

なせばなると、ずっと思っていた。
間違っていた。なしとげたものなんかない。
きみは、そのことに気づいていたか？

わかってくれるはずと、思っていた。
間違っていた。誰も何もわかってくれない。
きみは、そのことに気づいていたか？

ほんとうは、新しい定義が必要だったのだ。
生きること、楽しむこと、そして歳をとることの。
きみは、そのことに気づいていたか？

まっすぐに生きるべきだと、思っていた。
間違っていた。ひとは曲がった木のように生きる。
きみは、そのことに気づいていたか？

サヨナラ、友ヨ、イツカ、向コウデ会オウ。
(「イツカ、向コウデ」)

むずかしい言葉は使われていないが、すぐわかる詩とはいえない。「きみ」とはだれなのか。友であるかもしれない。友に語りかけられている作者自身かもしれない。この詩を読む者が、死者に「きみ」として問いかけられているのかもしれない。くりかえし何度も読み、そのつどいろいろな思いに駆られる。正解はない。死者の「実像」をさがしあぐねても正解がないように。くりかえし読むことで、詩の言葉は豊かさを増していく。長田弘によれば、それは情報として流通する言葉の対極にあるものだ。詩を読むことは、日常の時間の流れを変えることだ。

友の死に出会い、忘れられない思い出を書く。そのとき死者は、アルバムに貼られた1枚の写真のように、しかるべき位置におさまる。しかし、哀悼には別のかたちがある。死者を記憶し、その記憶と自分との対話を重ねること。「記憶」を名詞ではなく、「記憶する」という動詞にすること。そう作者はいいたげである。

死者はもはや何も語らない。語らないことにおいて「沈黙する言葉」を語っている。死者は「死んだ」のではない。「死んで・いる」存在だ。かけがえのない死者もまた、名詞ではなく、生者にとって動詞であることをやめない。『死者の贈り物』はそんなことを考えさせられる詩集である。

